（７）乾田直播栽培（早期播種を含む）における雑草防除の考え方

雑草防除のポイントは乾田期間中にある。現在使用できる除草剤には、稲出芽直前に使用できるラウンドアップマックスロードに加え、マーシェット乳剤の同時処理がある。その後入水前に、ノビエに効果のあるクリンチャーＥＷやクリンチャーバスＭＥ液剤を施用する。これらの体系的な防除を実施して、入水時の雑草の発生量及び生育を抑えるようにする。常に雑草の発生や大きさに注意し、防除が必要になったら直ちに適切な除草剤を適期に散布することが大切である。除草剤散布後も残草、後発に気を配り、引き続き防除時期を逸しないようにする。

イネの出芽揃いが良好で生育が速く、早い時期に入水できれば、乾田期間中の除草剤の散布回数の削減につながる。

乾田期間中に適用できる除草剤は多年生雑草に対する効果はほとんどない。乾田直播栽培を行うほ場は多年生雑草が発生しないほ場を選ぶことが第一である。

ア　は種前の冬生雑草の防除

春先に冬生雑草の発生量が多い場合には、は種時に雑草が残らないように、耕起前までにラウンドアップマックスロードの散布により防除しておく（ラウンドアップマックスロードの総使用回数に注意)。

イ　乾田期間中のノビエを中心とした防除体系

（ア）ノビエ等雑草の発生が多いほ場では、は種直後にラウンドアップマックスロードとマーシェット乳剤を散布して後発する雑草の密度を下げておく。また、は種前の耕うん、砕土、整地を丁寧に行うことで、マーシェット乳剤の土壌処理効果が高まり、次の除草剤散布まで余裕ができる。後発雑草は(イ)～(ウ)に従って防除する。

（イ）基本的には入水前にクリンチャーバスＭＥ液剤を散布する。ただし、この処理でヒエを取りこぼした場合、ヒエの葉齢が大きくなりすぎて効果のある薬剤がなくなるので、取りこぼしのないように十分注意する。そのためには、ノビエの葉齢を正確に把握しておくことが大切である。

（ウ）乾田期間中の雑草防除における一般的な注意事項は以下のとおりである。

a 散布期のノズルの選定は適切に行う。病害虫防除用の霧状になるノズルは風により飛散するので適さない。また、少量散布用や泡状になるノズルも適さない。除草剤散布用のシャワー状に散布できるノズルを使用する。

b ノズルを下げて、雑草の茎葉に十分付着するように散布する。

c 好天時に散布する。風が強いと散布液が風に飛ばされて十分な量を散布することができない。また、散布後 24 時間以内の降雨は除草効果を低下させるので、降雨があると予想される場合には散布を控える。同時に、雑草に露の付いている時間の散布は控える。

d 除草剤の適用可能な雑草の葉齢以内で散布し、散布適期を失しないように注意する。適用限界以上の雑草の葉齢では除草効果が著しく低下する。

e 雑草の発生が部分的なときは、茎葉処理剤を発生している部分にのみ散布(スポット処理)すればよい。

f 入水は除草剤散布後最低３日以上たってから行う。

g 除草剤散布後は散布器具を十分に洗浄する。

ウ　入水後の雑草防除

入水後の雑草防除は、漏水が止まり湛水条件が得られたら、適用のある一発処理剤を散布することにより行う。